

播磨ヒストリア

播磨町の歴史をひも解き、その時代にタイムスリップして、当時の出来事をエピソードを交えながら紹介します。

播磨町郷土資料館 館長補佐 宮柳 靖
☎ 079(435)5000



▲土山駅に停車した別府鉄道機関車

エピソード拾

別府^{べふ}鉄道開業90年

今回は、昭和59(1984)年1月31日に廃線となった別府鉄道のお話です。別府鉄道は、多木製肥所を起した多木久米次郎が、約100年前に設立した会社で、当初は「別府軽便鉄道」としていました。社章は、多木製肥所と同じで、古代に田畑を耕すために使ったスキを図案化した珍しいものです。(郷土資料館展示)

大正10(1921)年9月に野口線が、大正12(1923)年3月に土山線が開業し、肥料の貨物輸送が本格化します。土山線では、機関車に客車1両と貨車を連結させた編成で平日、お正月などの休日は客車だけを引いていました。昭和7(1932)年に中野駅ができましたが、土山～別府港間はわずか14分でした。戦時中、野口線は運行休止となり、土山線は肥料輸送の重要性から運行が続けられました。

2路線とも貨物と乗客を運んでいましたが、土山線は貨物輸送が中心で、野口線は旅客輸送が中心でした。土山線は、別府港駅から国鉄(現JR)山陽本線「土山駅」までの4kmを、ピーク時には5往復していました。

戦後の混乱がおさまった昭和30年代になると、

別府の浜は潮干狩りや海水浴をする人たちにぎわい、5月の連休や夏休みには2路線で臨時列車が運行されるほどでした。さらに、土山線の貨物輸送は昭和44年に年間22万トンもの肥料を運び、わずか4kmの私鉄が取り扱う量としては驚くほどの量でした。

昭和39(1964)年から蒸気機関車にかわりディーゼル機関車が導入されますが、客車1両に貨車数十両をつないだ混合列車では、中野駅を出た機関車が大中遺跡あたりにさしかかると勾配のため速度は歩くほどになっていました。また、雨の降った翌朝は線路が錆びて通電せず、一番列車が踏み切りを通過しても警報機が鳴らなかったこともあり。そのため、車輪を空転させてレールの錆びを落とし電気を流れるようにしたそうです。地元では、走る音から「多木のガッタン」として親しまれてきましたが、土山駅で貨物取扱ができなくなったことから63年の歴史に幕をおろしました。

線路跡地は、「であいのみち」として歩行者・自転車専用道路として生まれ変わり、鉄道の歴史を今に伝えています。

町の人口 12月1日現在

(住民基本台帳人口+外国籍人口)
34,623人(+96人) 男…16,977人(+38人) 女…17,646人(+58人) 世帯数…13,939(+49)